

※気仙新聞第11号は「三陸復興」特集の第2弾としてお届けいたします。過去に幾度となく津波を経験してきた気仙にとっても、このたびの大津波は記憶にない深く大きな爪痕を残しました。それでも、1年を経た今、瓦礫が取り除かれた広い大地に立ち、気仙の未来を力強く描き続けるたくさんの人々がいます。そのような人々の姿から、新しく創られてゆく気仙の未来を想像していただければ幸いです。



これから、もっと大きくなる成長途中のホタテ貝



小石浜青年部部長の佐々木淳さんと総括の佐々木亨さん



愛情込めて育てた「恋し浜ホタテ」が皆さんに届くまでにはもう少しの時間が必要です

立ち上がる気仙の漁業

「恋し浜ホタテ」復活を目指して

「恋し浜ホタテ」のブランド化に伴い、直販とPRのために平成十五年にメンバー十人で設立した大船渡市綾里漁協小石浜青年部。震災による津波の被害から立ち上がり「復活の狼煙」を上げたいと養殖の再開のために奮闘していました。

進んでいる瓦礫の処理

「恋し浜ホタテ」のブランド化に成功しただけではなく、水産の町大船渡のイメージアップにも貢献してきた大船渡市綾里漁協小石浜青年部。震災から一年が経つ小石浜漁港に青年部のメンバーを訪ねました。

漁港の修復はまだでしたが、瓦礫が片づけられ、予想よりもきれいな港。漁港に沈んだ瓦礫は、ボランティアの皆さんが精力的に手伝ってくれたとか。「おかげで震災前よりきれいになったんじゃないかと地域の人も喜んでいます」と小石浜青年部部長の佐々木淳さんは笑います。

軌道にのりはじめた漁家の仕事

おもにホタテとホヤの養殖を行う彼ら。生育に三年から四年かかるホヤは、まだ種付けの段階です。ホタテは二年生育。今年は種からの養殖も再開していますが、現金収入を得るために、育って一年の「半成貝」を北海道から取り寄せ、耳吊り作業を経て養殖しています。

この日の朝は、北海道で水揚げしたホタテの半成貝をフェリーで大船渡市内に運び、深夜から朝までの耳吊り作業。夜通しの作業を、多いときは五十人ほどで行うそうです。ホタテ養殖で一番大変なのが耳吊り作業。その後は、成長に伴って重くなるホタテを常に同じ層に置くための浮力調整、そして貝に付着物がつかないようにするための根気のいる作業が続きます。

「恋し浜ホタテ」の今年秋口の出荷を目指す青年部メンバーや小石浜養殖組合の人たちの海の復興にかける意気込みは強く、二十軒ある漁家の全員



雪の舞う中、早朝からのボイル作業

気仙のワカメ

岩手県のワカメ生産高は日本一ですが、中でも気仙地方はその主力産地です。「ワカメ養殖発祥の地」とされる大船渡市末崎町の門之浜漁港は、三月後半に入りワカメの収穫で早朝から活気にあふれていました。

朝四時に出港してワカメを刈り、七時からボイル作業、そして芯抜き。多くの人が海岸での作業に精を出しています。ワカメの収穫は四月いっぱい続き、塩蔵ワカメとして出荷されます。昨年の八月に種付けをしたワカメですが、育ちも良く、漁師さんたちの表情も晴れやかです。

「海は大丈夫。海の恵みも戻っています。栄養素がたっぷりのワカメを食べて元気になりましょう」と話す鎌田芳勝さん。「ワカメ養殖発祥の地」の漁家としての誇りに満ち溢れていました。

が養殖を再開しました。

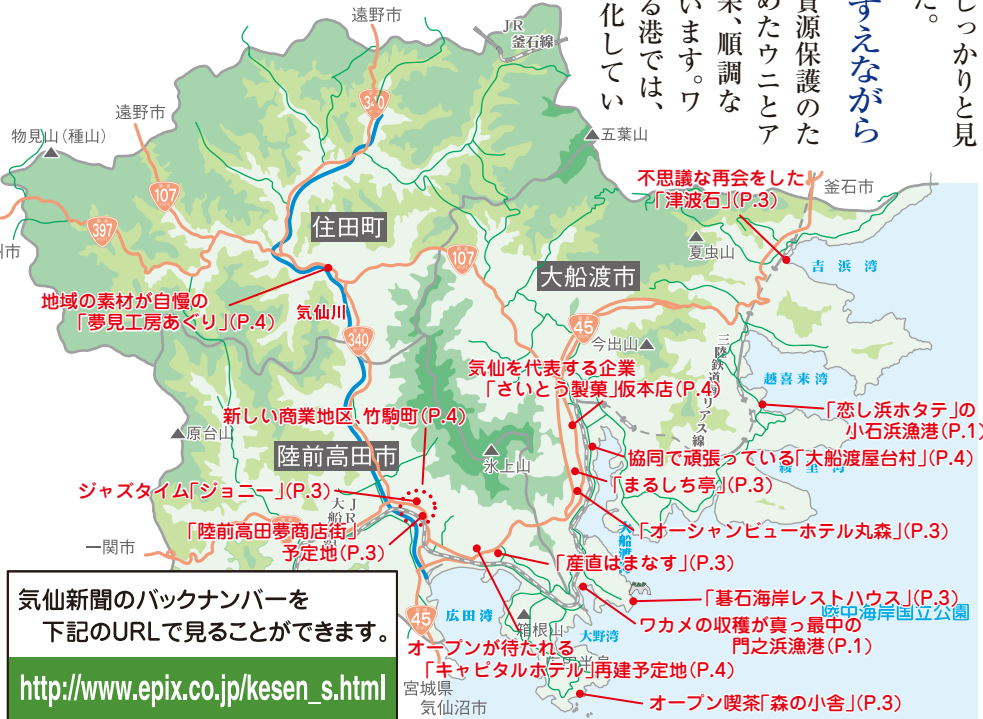
「やる気は十分なので、漁港や荷捌き施設などの早い復旧を望みます。養殖は再開していますが、復旧のためにはどちらも必要不可欠なものです」と話す佐々木部長。養殖組合として先駆的な活動をしてきた経験と、「恋し浜ホタテ」という有名ブランドを作ってきた自信がその目にしっかりと見ることができました。

復旧の先を見すえながら

昨年と今年度は資源保護のために採らないと決めたウニとアワビは、調査の結果、順調な成育が確認されています。ワカメ養殖をしている港では、刈取り作業が本格化しています。

彼らは今、海の回復力の早さに畏敬の念をいだいているといいます。まだ養殖棚が少ないうえに、いっしょに成長が早いのです。

震災後は、さまざまな地域から「イベントに出てほしい」と要請があり、ホタテ汁のおふるまいをして



気仙新聞のバックナンバーを
下記のURLで見ることができます。
http://www.epix.co.jp/kesen_s.html

明日に向かって頑張っている気仙人

逆境にも負けずに頑張っている方々にお聞きしました。

震災復興の一助になりたい。



及川雄右さん

オーシャンビューホテル丸森
代表取締役社長

高台のため、被災を免れたオーシャンビューホテル丸森は震災当日から避難して来た約五十人にロビーと宴会場を解放。直後から報道関係者が宿泊し、その後はライフレイン復旧工事関係者として、仮設住宅建設関係など、途切れることなく宿泊があり、宴会場に泊ったお客様もいたそうです。

最近週末がボランティア、平日は会社関係の復旧工事に携わる人たちの宿泊が多く、歓送迎会などの宴会も増えてきました。

仕事を続けることができたことに感謝しているという及川さんは「今回の震災で、人に生かされていることを感じました。人の役に立つことをしていくことが使命だ」と笑顔を見せました。

『虹色ほたる～永遠の夏休み～』が映画公開！



川口雅幸さん

小説家で宝飾店を経営する

二〇〇七年に出版しこれまでに二十一万部を売り上げた『虹色ほたる～永遠の夏休み～』の著者・川口雅幸さん。その川口さんの本業は宝飾販売。JR大船渡駅前に店舗を持つ老舗でしたが津波で店舗が全壊し、今は高台に新店舗を建設中です。

その川口さんに今年になり朗報が届きました。以前から映画化の話が進んでいた『虹色ほたる』の公開が今年五月に決まったのです。監督は「ワンピース」の宇田綱之介、音楽が松任谷正隆、主題歌を松任谷由実が歌うという豪華スタッフ。この映画の封切りは気仙の力になるとともに、全国の皆さんにも夢と希望を与えてくれるに違いありません。

さんまらーめんで観光客を増やしたい。



小川廣文さん

(株)小川代表取締役社長

大船渡市の「碁石海岸レストハウス」小川廣文社長は震災後一ヶ月ほどで営業を再開しました。水も電気もない中で営業でしたが、地域住民の要望に応じて、盛岡市の問屋まで買い出しに行き、食料品の販売を行ったそうです。

小川さんが会長を務める大船渡さんまグルメ研究会では、大船渡をPRするために「さんまらーめん」を市内数店で提供し、活動しています。震災後の支援への感謝の気持ちと、地域住民に楽しい時間をプレゼントしたいと、昨年秋に「けせん復幸まつり」というイベントを開きました。「さんまらーめん」を提供する店を増やし、観光客を増やしたいというのが小川さんの願いです。

一時の安らぎを与えていきたい。



赤川勇治さん

オープン喫茶「森の小屋(こや)」

陸前高田市広田町でオープンカフェを営む赤川さんは冬は実家の水沢市に帰っており、震災の三日前に戻ったばかりでした。

孤立した地区のために実家のご家族や近所の方々と協力し物資調達して往復すること7、8回。自衛隊の本格的な救援活動が始まるまで地区の避難生活を支えました。その後、内陸の温泉の協力を得て入浴支援に従事するなど地区のために奮闘しました。

カフェは七月から被災者の要望に心えて再開、被災者の癒しの場としても提供してきました。今年は支援活動の仲間も春から活動を再開するという事で、引き続き被災者の安らぎの場の提供に努めていきます。

椿寿弁当で大船渡の良さを伝えたい。



新沼 哲さん

まるしち亭 亭主

大船渡市大船渡町の「ウエディングパレスまるしち」は一昨年前の十月にリニューアルオープンし、営業わずか数ヶ月で、津波に流されてしまいました。

震災後「泊まる」ところはないか？という消防団員の一言がきっかけで、高台にあった父親の家を復興支援従事者の宿泊所として利用することにしたのです。現在は民宿の主人として、そして、大船渡でただ一軒となった「椿寿弁当」を提供する仕出し屋として張り切る新沼さん。先日も復興支援ツアー客から「美味しかったと言われて勇気が出た」と話していました。今後も地場のものに手を加えて美味いものを提供していきたいと目を輝かせています。

陸前高田市の元気で恩返ししたい。



小笠原修さん

陸前高田未来商店街 専務理事

陸前高田市竹駒町に建設予定の「陸前高田未来商店街」専務理事の小笠原修さんは昨年末から忙しい毎日を送っています。自身の店「ファッション・ロベ」の再建と、仮設店舗「陸前高田未来商店街」を作るための協同組合の設立準備、中小企業基盤整備機構への申請や、商店街に入る人たちのさまざまな会議。慌ただしい毎日ですが、それが「幸せ」と小笠原さんは言います。

今の困難な現実と向き合い、未来の陸前高田市を思いながら復興にかける毎日。全国から受けた元気を「陸前高田市の元気」でお返ししていきたいと八月のグランドオープンを目指して頑張っています。

ここに来たら会えるよね、の気持ちで。



照井由紀子さん

ジャズタイム「ジョニー」

周一髪のところを裏山に避難して無事だった照井さんでしたが、想い出がいっぱいの店舗と何千枚ものレコードが一瞬にして流れ去りました。その後、避難所で生活しながら被災者に自慢のコーヒーを振る舞ったり、お盆期間中は常連さんに元気な姿を見せるためにテントで仮営業。今は仮設店舗で営業を再開しています。

失ったレコードもジャズをメインに全国から送られてきました。四月には新たな仮店舗へ移りますが、「ジョニー」を残すためになんでもお手伝いしたいというファンの声援を受けながら、この先も永く続けるために身丈にあったスピードで将来に向けての夢を描いていきたいと話します。

自分たちの野菜でみんなに元気を。



松本タミ子さん

産直はまなす組合長

陸前高田市米崎町の「産直はまなす」は震災後、気仙管内で一番早い昨年の五月二十六日産直を立ち上げました。買物をする場所がなくなってしまう地域住民を救い、自分たちの作った野菜を食べ、ほしいという思いで立ち上がったのは、米崎町の専業農家のお母さんたち。十二人の生産者が集まり、毎朝自分たちの作った自慢の野菜を持ち寄っています。今年の冬は例年になく寒さで畑の土が凍り、つるはしを使わないと野菜を収穫できなかったとか。

開店から九ヶ月。お客様の「新鮮な野菜が安く買えて嬉しい」という声に元気づけられ、産直はまなすのメンバーは頑張っています。

うごく七夕で絆をつなげたい。



福田紀雄さん

うごく七夕実行委員会事務局長

震災の影響により開催が危ぶまれた、陸前高田市高田町の「うごく七夕まつり」。しかし、江戸時代中期から連綿と続く祭りをとだえさせたくない、何より鎮魂の願いが込められた祭りをぜひとも開催させたいと考えた福田紀雄さんたち高田町の青年たちは実行委員会を作りました。

今年も例年通り八月の六日・七日の「うごく七夕まつり」のために福田さんを始め、実行委員会のメンバーは日夜奔走しています。町内会がほとんど崩壊してしまっただけで、祭組として絆をつなげたいというのが福田さんたちの願いです。そして、子どもたちの思い出づくりのために実行委員会の活動は続きます。

「津波石」との不思議な再会

大船渡市三陸町吉浜

柵木澤正雄さん

はのきざわまさお



岩手県は世界で最も津波エネルギーを受けた地域といわれ、これまで何度も大きな津波被害を受けてきました。そのため先人たちは、後世にその教訓を残そうと各地に津波記念碑を建ててきました。大船渡市三陸町吉浜（よしはま）の「津波石」もその一つでした。時がたち、いつしか道路工事で埋め戻されてしまったこの「津波石」。このたびの大津波で再び現れ、地域の住民を驚かせています。



重さ8000貫（およそ30トン）の津波石と刻まれた先人の碑文。

「津波石」の話題が現実

柵木澤正雄さん（八十三歳）の目録は、家から六〇メートルほど離れた海岸の防波堤周辺への散歩でした。同級生の柿崎門弥さんと二つ年上の白木澤平七さんが散歩仲間。時間はいつも午後二時頃。海岸周辺を一時の間ほど散歩して帰ってくるのが常でした。ところが大津波が来た三月十一日、柵木澤さんはなにげなしに午前十一時半頃散歩に出かけました。すると不思議なことに、何の打ち合わせもないのに、いつもの三人が防波堤付近で出会ったのです。誰とはなしに「津波石」の話になりました。この辺に「津波石」と彫った大きな石があったっけなア（あったよね）。石の上の上つてよく遊んだもんだ。あの石はこの道路をつくるときに埋められて半世紀にもなるが、みんなの記憶から消えてしまっ。もう知っている人も俺等くらいなもんだ。今あの石があれば、きつと町の文化財になつていけるべなア（なつていけるだろう）。

「なあに、そのうち大津波が来て道路も流されてしまえば、また見ることもあへんア（あるだろう）」と笑いながら話したと言います。

半世紀ぶりの再会

大津波がやってきたのはその日の午後。三人が「津波石」のことを話題にしてからわずか四く五時間後のことでした。それから二週間後、向こう岸に渡る仮設道路ができ、柿崎さんがバイクに乗って「津波石」のあった周辺を見に行ったところ、崩れ落ちた道路の下に石らしい物を見つけた。さつそく柿崎さんと柵木澤さんは、郷土史の研究をしている木村正継さんと、昔道路工事にたずさわっていた木川田平三郎さんの二人をとめない、スコップを持って行ってみました。掘ること二時間。やつとで四分の一ほど掘り進み、水で表面を洗い流してみると、確かに「津波記念石」と掘られているのがわかりました。

刻まれた津波の記憶

その後重機を使って全部を掘り出し、ようやく半世紀前の姿を現した「津波石」。この石は巨大な花崗岩で、タテ三・七メートル、ヨコ三・一メートル、高さが一・一メートルありました。正面の上方には「津波記念石」と大文字で彫られ、下の方には「前方約二百米突吉浜川河口ニアリタル石ナルカ昭和八年三月三日ノ津波ニ際シ打上ケラレタルモノナリ重量八千貫」と刻まれています。この碑文から、この石は昭和八年三月三日に発生した昭和三年三陸地震で発生した大津波で、二百メートル先の吉浜川河口付近にあったものが押し流されてこの場所に移動し、当時の村民が後世への戒めにと碑文を刻んだことがわかりました。

後世に引き継ぐ大切な役目

柵木澤さんたちは、この出来事を思い起こすたびに不思議な気持ちでいっぱいになるといいます。「つは、あの日に限って午前中に散歩に行ったこと。いつもどおりの時間に散歩していたら三人とも津波に吞まれていたかも知れませんが、もつと不思議が、午前中に話したことがその日の午後には現実になってしまったこと。大津波がくればきつと「津波石」が現れるだろうと話したことがその日の午後には実現してしまったのです。柵木澤さんたちは今、この先人が残した貴重な石を次の世代にしっかりと引き継ぐことが自分たちの役目と考えています。

古文書が作った陸前高田と小笠原の縁

天保十年、気仙郡小友浦（現在の小友町）から中吉丸（なかよしまる）という商船が海産物を積んで江戸に出港しました。目指すは茨城県の利根川。ところが、金華山沖で時化に合い、乗組員六人の中吉丸は小笠原諸島の父島まで流されてしまったのです。ナザニエル・セボレーという島の世話役に救助された中吉丸の乗組員たちは、船の修理などで二ヶ月ほど島に滞在。その後無事に銚子港までたどり着きました。

しかし、当時は鎖国中だったために、この事実が伝えられずに忘れ去られてしまっていたのです。

四年前に陸前高田市の市民講座「古文書研究会」でこの事実に出合った及川征喜さんは物語に魅了されました。この古文書は気仙町の菊池達（さとし）さん所蔵のもの。及川さん夫婦と菊池さん夫婦は旅行を計画し、小笠原の教育委員会に連絡をしたところ、担当してくれたのがナザニエル・セボレー・孝さん。なんと、中吉丸を救助した世話役の子孫だったのです。これが陸前高田市と小笠原の本格的な交流の始まりとなりました。

平成二十二年、小笠原で「小友浦船漂着百七十年特別展」が開かれ、中吉丸が持ち帰った聖書やギヤマン盃などが里帰りし、展示されました。しかし、その直後の大震災。陸前高田市博物館に展示されていた聖書などは流され、菊池達さんも帰らぬ人となってしまったのです。

現在、小笠原では小笠原ビジターセンターに陸前高田市支援コーナーを設置し、現金の寄付や車いすの寄贈、有志による手作りのカレンダー五百冊の無料配布など、さまざまな分野で積極的な支援をしています。将来は「交流の船」で気仙・岩手と小笠原を結びたいという小笠原の教育委員会の言葉に、交流のきっかけを作った及川さんは「陸前高田市から小笠原までは南に千三百キロ。もつと付き合いを深めていきたい」と明るく話してくれました。



小笠原との馴れ初めを語る及川征喜さん



小笠原在住のカメラマン富田マスオさんが作成したカレンダー。被災者に提供し喜ばれました

詩集『3.11の詩人たち』癒えぬ心を一編の詩に託して



詩集『3.11の詩人たち』とウィーンから寄稿した菅野祥子さん。

「私達は、たくさんさんの愛と善意で励まされました。生死の境目は、ほんの紙一重でした。生かされた命。被災者であっても誰かの役に立ちたい。何かをしなければ。そうして得た答えの一つが、この詩集です。」と巻末に書かれているこの詩集は、「大船渡詩の会」が今年一月に発行した小さな詩集でした。

震災からの復興の中で心に浮かぶ言葉を紡ぎ出した詩の数々はテレビや新聞では伝えることのできない被災地の深い心の傷を表現し、発刊の噂を聞いた全国からの注目がたくさん来ているそうです。

陸前高田市出身でウィーン在住の音楽家菅野祥子さんの詩をご紹介します。

春なのに

菅野祥子

桜咲く季節がまた訪れるこの年、僕は一人たずみ波の音を聞く。空青く果てしなく、山の青、海の青、一つに交わって、僕は凜とする。春なのに、春なのに、何かがこぼれていくよ。春なのに、春だから、僕はさよならを言うよ。

駄菓子屋の曲がり角いつも匂いは一緒で、犬のボチがワンと鳴く変わらない風景。朝市の匂いも人のざわめきもまた、僕の中に生きてる、変わらない風景。春なのに、春なのに、何かがこぼれていくよ。春なのに、春だから、僕は前だけを見るよ。

お前が奪っていった、大切なものはみな、夜になれば空が映し出すだろう。手をつないで歩いたお寺のわきの細道、一本松はきつと何も忘れない。

いつの日か、僕もまた、一つになれると信じて、春なのに、春だから、僕は前を向いていくよ。春なのに、春だから、きらく海も風の音も、春なのに、春だから、僕は前だけを見るよ。

問合せ先／簡 智恵子
電話／〇九二七四七四

リアスの歳時記

文／金野静一
絵／庄司暁子



「ナゴミ・スネカ」

海女が仕事の合間に焚き火で冷えた体を暖めると、しぜんナゴミ（火形）がつく。アマミとかナモメとも言うが、これは火斑（ひはん）のことである。三陸海岸一帯に、小正月の晩に各戸を訪れて、子供たちをおどす「鬼」がいた。いわゆる「ナマメハギ」「ナゴミタクリ」などと呼ばれる歳神（としがみ）の象徴である。

大船渡市の吉浜では「スネカ」と称するが、「ズネ皮たくり」の略語と考えられる。この歳神は、炉端にうずくまっ。ばかりいて、仕事もせず、勉強もしない怠け者を懲（こ）らしめるために鬼の姿になってやってくるものであった。炉のそばにいて、暖をとってばかりいると、スネ（脛）に火斑がつく。この火斑を「たくり（剥ぐ）」にくるのが「スネカワタクリ」であり、「ナゴミタクリ」であった。

同じ火斑であっても、海女のものには「ナゴミタクリ」に叱られるようなものではない。怠け者どころか、働き過ぎのために生じるナゴミであった。（中略）それは肌の白い海女ほど鮮明に出ることになる。海女同士で、お互いの火斑を見比べて「大きく出た」「色濃く出た」などと話し合っ。は大声で笑い合う。

海女の体にできた火斑は、稼働期間中（春から秋）は消えないのが普通であった。ところが、この期間中でもその火斑が見事に消えたり、あるいはさきわめて薄くなり、消えかかることがある。

それは、遠方に出稼ぎに行っていた夫などが不意に帰宅して、四、五日逗留したときに、その変化があるというのである。これを目ざとく見つけた仲間の海女は、「汝（うが）のナゴミ、あ、見えなくなったが。いま、ナゴミタクリが帰って来からな」と、冷やかすのだという。

リアスの歳時記は金野静一著『海の年輪』（ツワノライフ出版）より抜粋したものです。



2階まで浸水した津波直後の本店。今は仮本店で営業している



昨年7月に座礁した赤崎町から引き揚げられた七夕船大船渡丸。今年は夏祭りで海を彩る姿が期待される



震災後に発売された「復興福朗(ふくろう)」と3月14日から発売された「絆〜こころはひとつ〜」

気仙とともに

[No.11]

「気仙をけん引する企業としての使命感を！」

齋藤 俊明さん

さいとう製菓株式会社代表取締役社長
大船渡観光物産協会会長



現在の仮店舗

震災直後、大船渡市と陸前高田市の避難所に「かもめの玉子」などを配るなど被災者支援に尽力するとともに、早期の生産再開で地元経済の復旧に貢献したことを評価され、「毎日経済人賞特別賞」を受賞したさいとう製菓の齋藤俊明社長にお話を伺いました。

受賞の直後の訪問なので、最初にお祝いを述べて、感想をお聞きしたら、「褒められようとしてやったことではないけれど、いいことをしているときちんと見てくれる人がいる。それが嬉しかったです」と笑顔で答える齋藤社長。

震災発生時は盛岡市に出張中で六時間かけて大船渡に戻ってきたそうです。そのまま、家族と社員の安否確認に奔走したのは、当日のうちに確認できなかった社員二人。釜石で被災した営業マンは二日間釜石の避難所で過ごしたそうです。会社に戻ってきたとき、彼は「すみません。かもめの玉子を選難所にこちそうして来ました」と謝りました。「なんと気が利くことをしたんだ！いいことをした！」と営業マンを褒めた齋藤社長。新年の社員訓示の際には、彼を表彰し、金一封まで出したということです。

震災三日目からは大船渡市の中井工場が生産したかもめの玉子などの在庫を持ち避難所に配って回りました。三月は年間でもトップクラスの出荷量。一日二十五万個の生産がありました。それを大船渡市と陸前高田市の避難所、そして高齢者の施設に配ったのです。

避難所回りをしながらも、齋藤社長は絶対絶命だと考えていました。一世の中がめちやくちやになり、仕事どころではない。会社も終わるかと思ったそうです。しかし、震災直後の三月二十三日には社員を全員集めて、今後の方針を伝えました。まずは会社の復旧作業と、被災した五店舗を片づけること。そして、「再開してもこの状況では売れないはずだ。休職か一時解雇を覚悟してほしい」と伝えました。なぜなら、七十を超える得意先も被災してしまっただけです。商品を作っても

も売れる場所がないし、買う人も少ないだろうと齋藤社長は考えたのです。

そんな状況でも会社の再開を決意したのは、大船渡をけん引する企業であるという使命感からでした。「我々も立ち上がったから早くみんなも立ち上がったほしい」という地域へのメッセージ。そして、社員の雇用を守ること。なにより、全国の心配してくれているお客様に安心してもらいたい。さまざまな思いが齋藤社長を奮立たせました。

昨年四月に中井工場が再稼働し、同二十日にもかもめの玉子の生産がスタートしました。工場の百％稼働は六月から。合わせて、休職や一時解雇された社員も全員復帰することができました。五月以降は売り上げも大幅にアップ。直営店がいち早く立ち上がったために、自衛隊や警察官、ボランティアの人たちが土産物として購入してくれました。

「この震災で、信頼関係の大切さをつくづく感じました。良心的な品質で、誠意を持って仕事をしたので、お客様に支えていただいた。業者さんとの信頼関係があったので、優先的に駆けつけられました。おかげさまでという感謝の気持ちで、新たな一歩を踏み出した」と笑顔を見せる齋藤社長。

最後に、商工会議所会頭であり、大船渡市観光物産協会会長でもある齋藤社長は「今年は三陸大船渡夏祭りをできる範囲で精一杯やります。辛い思いをしている人は大勢いる。慰めようもありません。少しでも楽しい思いをして元気を回復してほしいです」と、夏祭りへの思いを話してくれました。大船渡の夏を彩る花火と海上七夕のコラボレーションを見るのがとても楽しみです。

Topics

大船渡屋台村

地域のコミュニケーションの場を作りたい



大船渡屋台村を象徴する赤い門の前で笑顔を見せる屋台村店主たち

大船渡市大船渡町に店舗数二十の大船渡屋台村がオープンしたのは、昨年の十二月二十日。飲食店街のほとんどが全滅した気仙地区にとっては待望のオープンでした。

年末年始の開店ということもあり、出足は順調。メディアにも取り上げられ、一躍大船渡の観光名所になった感があります。

屋台村構想が持ち上がったのは津波直後の四月ころ。出店を決意した店主たちは毎週会議を開き、オープンに備えてきました。自分たちの店を復活させるため、人々が集う場所を作るため。自分の店の準備だけでなく大変なのに、共有スペースの塀などは店主たちが一致団結して作りしました。今でも月に一度の会議を開き、より良い屋台村を作ろうと頑張っています。

中華・鮎・和食・ラーメンから居酒屋まで、さまざまなお店が入っているた

Topics

キャピタルホテル 再建に向けて始動中

陸前高田市のランドマーク的存在であった「キャピタルホテル1000」は津波で三階まで浸水したために閉鎖されてしまいました。今後は解体する予定ですが、それに代わる新しいホテルの再建計画が進んでいます。

場所は現在地から少し離れた内陸部に三階建てを建築して、来年の三月オープンを予定しています。地元雇用の女性スタッフを中心にしながらきめ細かいサービスを目指しています。

現在、陸前高田市内では宿泊施設や婚礼会場が不足しており新しいホテルに期待が高まっています。



津波後のキャピタルホテル1000

Topics

住田町の活性化につなげたい！

住田町世田米に「夢味工房あぐり」(ゆめみこうぼう)がオープンしたのは一月十七日。地場産のものを中心に、手作りの日替わり惣菜や米粉パンなどを販売。三月下旬からは住田フーズの鶏ハラミの販売も開始しました。

「夢見工房あぐり」はあぐり工房組合が経営していて、組合長の松田久子さんは以前より個人で米粉を使ったパン作りをしていたそうです。米粉パンの講習会に参加して腕を磨き、種山ヶ原ほらんや産直、イベントなどで販売をしていました。その活動を評価され、住田町役場から空き店舗活用事業に応募してみたらと声をかけられたのです。

出店を決意した松田さんは組合を作り、店舗を借りました。ところが、直後の震災。一時はお店を出すことを止めようかとも考えた松田さんですが、「六十過ぎてても頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうと思った。人がいれば！」と思い直しました。仮設住宅の建設などで大工さんが忙しく、お店の工事が始まったのが昨年の十一月。開店を考えてから、約一年がかりでお店をオープンすることが出来ました。

店頭に並ぶのは毎日五種類ほどの惣菜。きんぴらやフキの煮つけ、てんぷらなどが並んでいます。米粉パンに使う米粉はもちろん住田産のお米。一押しは「すみたつこバーガー」や「鶏ハラマヨパン」に入っているのも住田フーズで生産された鶏肉。すべてではありませんが、なるべく地場産のものを使っています。農家の協力で野菜や菌床しいたけなども置いています。

開店から一ヶ月が過ぎ、商品のファンも増えてきました。「年をとって、おかずを作るのが大変な人のために惣菜を用意しています。震災後、住田町には仮設住宅が出来、ボランティアの人も多く来るようになりました。その人たちに住田町の良さを知ってもらいたい。地元の人だけじゃなく、いろんな人の交流の場にして、少しずつ町を活性化させていきたいです」と松田さんは元気いっぱいでした。



組合長の松田久子さん(右)
夢味工房 あぐり
住田町世田米字世田米駅6-2
TEL 090-5595-1093
営業時間 11時～18時
定休日 日・木(変更の可能性あり)

【編集後記】

平成23年3月11日の発災から1年を経過し、被災地各地では追悼式が厳かに営まれました。被災地の現況に鑑みずと、震災復興に向けた各種の事業は、やっとスタート地点に立ったばかりであるというのが正直な実感です。

いまこそ、あらゆる人々が互いに手を携え、困難に立ち向かう気概が必要とされています。

今回の第11号は、前回の第10号に引き続き、「復興特集号」の第2弾として発刊いたしました。気仙人が「三陸復興」の旗印を掲げ、不撓不屈の精神で難難辛苦を乗り越えようとする取り組みの状況をご理解いただければ幸いです。

R100

本紙は古紙製紙率100%再生紙を使用しています

【気仙新聞 第11号 発行:平成24年3月30日】

◆ 岩手県気仙地方への移住・定住などのご相談は下記の窓口までお問い合わせください。

- 沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター(「気仙新聞」係)
電話 0192-27-9911 <http://www.pref.iwate.jp/info.rbz?nd=77&ik=3>
- 岩手県の総合窓口「定住・交流サポートセンター」(岩手県政策地域部地域振興室)
電話 019-629-5194(直通) http://www.pref.iwate.jp/uji_turn/
- 首都圏での総合窓口「いわて定住・交流支援センター」(いわて銀河プラザ リターンセンター内)
電話 03-3524-8282 <http://www.pref.iwate.jp/hp0401/>
- 大船渡市の窓口「企画政策部企画調整課」
電話 0192-27-3111 <http://www.city.ofunato.iwate.jp/>
- 陸前高田市の窓口「企画部企画政策課」
電話 0192-54-2111 <http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/>
- 住田町の窓口「町づくり推進課 移住相談窓口」
電話 0192-46-2114(直通) <http://www.town.sumita.iwate.jp/>

ちょこっとプレゼント



ちょこっとプレゼント読者の皆様から気仙新聞への感想やご意見を募集しています。はがきまたは封書に「ちょこっとプレゼント応募券」を貼り、住所・年齢・お名前を明記のうえお送りください。抽選のうえ5名様に「お菓子とワカメのセット」をプレゼントいたします。(第11号の〆切は2012年5月31日です)

【応募先】

〒022-8502
岩手県大船渡市猪川町字前田6-1
岩手県沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター「気仙新聞」係

ちょこっとプレゼント
応募券
【気仙新聞11号】